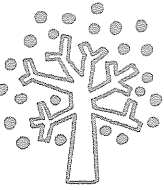


BS朝日テレビ「クロスファーマー・竹島問題」  
2012年9月15日

# 信じる道を生きる④

## ネット右翼との論戦から「半月城通信」へ



朴炳渉  
PARK Byoung sup

「二等国民」としての誕生  
日本がハワイの真珠湾を奇襲攻撃した半年後、私は日本で法的には日本人として生まれました。本来なら法的に韓国人として生まれるべきだったのに日本人として生まれたのは、日本の植民地に転落した大韓帝国の末裔のさびしい運命でした。しかし、法的に日本人とはいっても「内地人」と呼ばれた日本人と区別された「二等国民」であり、下層階級としてどん底の暮らしを強いられたのでした。そんな環境で私は育ちました。

終戦の日、朝鮮が日本の植民地から解放された喜ばしい日でした。私たちの親の世代は日本によって押しつぶされた民族精神を回復すべく、多くの民族学校を建てるなど明るい目標に向かって進んでいました。ところが、やがて露骨に日本政府の抑圧を受けるようになりまし。一九四七年五月二日、すなわち新憲法を実施する前日に天皇は議会の承認を必要としない最後の勅令二〇七号を発し、在日朝鮮人は「当

分の間、これを外国人とみなす」と布告しました。これが制度的な抑圧の始まりでした。新憲法が実施されれば、それまで法的に日本人とされた在日朝鮮人も当然基本的人権を尊重されるはずでしたが、それが外国人の名のもとに勝手に切り捨てられるのでした。

戦時中、日本は韓国・朝鮮人を皇国臣民にまつりあげ、青年男子がほとんどいなくなった日本へほぼ強制的に動員したのですが、敗戦によって兵士たちが復員し、韓国・朝鮮人が不要になるや、私たちを一方的に外国人とし、次に外国人を口実にして選挙権はもちろん、公営住宅への入居や、国民年金への加入、育英会の奨学金、傷痍軍人年金の支給などをすべて不能にしました。しかし、納税などの「義務」だけは当たり前とされました。その一方、政府は外国人には当たり前前の民族教育すら抑圧しました。そのため、多くの自主的な民族学校が廃校を余儀なくされ、私は日本の小学校へ転校せざるを得ませんでした。

私は高校生になった時、忘れられない思い出

てきたことをその本で改めて思い知らされました。

これに対していつか声を上げなければならぬと思います。実力も機会もない私には長らく無理でした。

### マイノリティにも五分の魂

やっと一九九五年になって機会が訪れました。パソコン通信でニフティやビッググループなどが主題別の会議室をもうけたので誰でもそこへ自分の意見を自由に書き込めるようになったのでした。これらの会議室に私は「半月城」というハンドルネームで差別問題や人権問題、民族教育問題、在日韓国人の歴史、関東大震災における朝鮮人虐殺、古代における日韓関係史など長年にわたって蓄積していたものを滔々と書

いたのでした。

ちょうどそのころ「慰安婦」問題がクローズアップされたので、これについても書いたところ、今でいうネット右翼から集中的な挑戦を受けました。これに負けじと必死で資料を調べて反論し、数年間にわたって彼らと果てしない論戦を繰り返して来ました。そうした書き込みは徐々に一冊の本を作れそうな分量でした。

その経験に自信を得て、さらに日本の戦争責任や戦後補償問題、靖国神社問題、南京虐殺問題などでもネット右翼と論戦を繰り返して来ました。その記録は現在「半月城通信」としてインターネットに公開しています (<http://www.han.org/ahalfmoon/>) が、ネット右翼こそが私を鍛えあげたのでした。そうしたネット右翼との論戦が一段落したころ、私は竹島・独島問題などで右寄りの歴史マニアたちと論戦を繰り返して来ました。そんな時、島根県が二〇〇五年に「竹島の日」を条例で制定し、日韓関係が悪くなりました。これを機に、私は竹島・独島問題を本格的に研究するようになりました。

その当時は竹島・独島問題に関する本は内容が偏ったものが多く、史実の把握がなかなか困難でした。そこで私は竹島・独島問題研究ネットワークを立ち上げてインターネット上で竹島・独島

があります。市役所からの出頭通知に応じて出向いたところ、外国人登録と称して真っ黒な印刷インクを五本の指に塗られ、指紋を外国人登録台帳などにぐりぐりと押すことを物理的に強いられました。犯罪者になったような惨めな気分でした。また、指紋を押捺した外国人登録証と称する手帳はいつも持ち歩かねばなりません。

こうした制度的な差別に加え、日本社会の韓国・朝鮮人に対する蔑視や偏見に私はほとんど押しつぶされ、学校では韓国人であることを隠して日本名を名乗っていました。大学に入ってから心機一転、本来の韓国名に戻し、周囲の不条理に少しずつ向き合うようになりました。

そうした折りに出会った一冊の本が『法的地位二〇〇の質問』でした。それは法務省参事官も務めた現職の検事である池上努が一九六五年に出版したのですが、同書は「日韓協定に基づく永住権を取れなかった者や取らなかった者の処遇は一体どうなるのか」という問いをもうけ、これに対して「国際法上の原則から言うと」「煮て食おうと焼いて食おうと自由」なのである」と記したのでした。日本政府は外国人の基本的人権すら認めず、「煮て食おうと焼いて食おうと自由」という発想で在日韓国・朝鮮人を扱っ

に関する情報の交換をおこない、その時に知り合った島根大学の内藤正中名誉教授とともに、二〇〇七年には『竹島・独島論争』（新幹社）を出版しました。この本は実証的な記述が評価され、日本図書館協会の選定図書に選ばれ、多くの図書館に備えられました。

竹島・独島問題は領土ナショナリズムを刺激しやすく、二〇一二年の李明博大統領の竹島・独島訪問などにみられるように日韓関係を一気に悪化させるダイナマイトのような存在です。こうした暴発を未然に防ぐには正確な知識の普及が不可欠なのですが、残念ながらたとえば明治政府が一八七七年に竹島・独島は「本邦関係これ無し」と指令した史実すらほとんど知られていないのが現状です。

さらに、最近では日本でも自国に有利な主張だけが教科書に載るようになり、次世代へ受けつがれつつあります。そんな潮流に一石を投じるためにも客観的な史実をできるだけ多くの人に知ってもらおうと同時に、日韓両国の学界で争点になっている問題点の解明に向けて努めるのが私の進むべき道だと信じます。  
(パク・ヒョンソビ／竹島・独島問題研究ネットワーク)

編集後記(探理夢到)

☆沖繩・高江のDVDを観た。抗議して座り込む市民を機動隊がごぼう抜きして引きはがす。女性一人に三人がかりだ。逮捕はしない。もし、「武装闘争」などという決定的に誤った姿勢を徹底的に克服して、一人人が結集して非暴力の抗議に徹したら、情勢は大きく転換するだろう。☆「一月解散説」が浮上して議員は浮足たっているようだが、言語道断だ。本日(一〇月一二日)の「東京新聞」の社説「憲法よりも党利党略か」がきつぱりと主張している通りである。〈歪曲民主政〉も極まりである。

☆今度の号で無事に創刊の年の四号を刊行できた。小さな雑誌ではあるが、インタビュアーや特集は高名な方のご協力も得た。執筆者と読者に深く感謝します。本号の特集は会心の出来映えと胸を張ることが許されるだろう。

☆雑誌刊行の成果を活かして、来年から知的拠点として〈友愛政治塾〉を創設する。錚々たる講師が一〇人も講義する。ぜひ、塾生になってほしいと切望します。

☆来年の第五号から、進藤栄一氏と海野八尋氏の連載がスタートする。世界情勢や経済分析は得手ではないので、弱点だったが、大きくカバーされ、啓発されるはずである。乞う期待だ。

☆最後に、本号に長文の村岡論文を掲載したことを寛恕ねがいます。また、拙著『ソ連邦の崩壊と社会主義』を、ぜひご一読ください。(到)

★九月下旬遅い夏休みでモスクワ(ロシア)とトリノ(イタリア)を訪問する、グラムシ研究者のツアーに参加した。印象的だったのは、旧ソ連の大国主義や官僚制を引き継いだプーチン政権の下で、ロシア共産党は生き延び、貧困や格差が広がる経済状態のなかで、高齢者を中心に一〇〜一五%の支持を得ていることだった。

★他方、イタリア共産党は力を伸ばし政権に近づくにつれて、党名は左翼民主党になり、さらに左翼が取れて民主党になり、今ではまったく姿が見えなくなっていたことだ。困難な人々の声の受け皿は、「五ツ星運動」の女性市長だという。「東京も知事は女性ですね」だって。(吉田万三)

計報

本誌読者の上島武氏が八月二日に亡くなった。享年八十一歳。

献本

・若宮啓文『ドキュメント 北方領土問題の内幕―クレムリン・東京・ワシントン』筑摩選書  
・松竹伸幸『「日本会議」史観の乗り越え方』かもがわ出版

・羽場久美子『ヨーロッパの分断と統合』中央公論新社  
・『地域文化研究』第一七号、地域文化学会

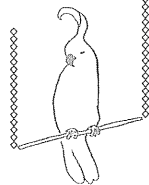
編集委員会

編集長：村岡 到 NPO日本針路研究所

編集委員：

- 佐藤和之 高校教員
- 澤藤統一郎 弁護士
- 出口俊一 兵庫県震災復興研究センター事務局長
- 西川伸一 明治大学教授
- 平岡 厚 元杏林大学准教授
- 松本直次 ヤマギシ会東京案内所
- 吉田万三 元東京都足立区長

告：次号から68頁になります。アイデアを寄せてください。



季刊 フラタニティ 第4号

(本号特別増頁・68頁)

発行 2016年11月1日

編集長 村岡 到

定価：600円+税

定期購読：4号=3000円

(税、郵送料含む)

1号のみ：800円(同)

発行 ロゴス

〒113-0033

東京都文京区本郷 2-6-11-301

TEL 03-5840-8525

FAX 03-5840-8544

logos.sya@gmail.com

http://logos-ui.org